

民話の語りのデータベース化と公開の現状

沖縄伝承話資料センター会員・専修大学名誉教授 樋口淳
 神奈川県川崎市麻生区王禅寺東 5-43-23
higuchi007@hotmail.com

Key word : 民俗学 民話 デジタル化 データベース 博物館
 情報発信

要旨 :

民話の聞き取り調査は、1970年代からテープレコーダーを使用した音声記録が主流になった。日本は、機材の普及も早く、民間の研究者も多かったので、2000年に至るまでの記録数は30万件を超えたものと思われる。私たちは科研費の助成を受け、今日までに沖縄を中心に約10万件のデジタルデータを整理した。民話語りは、日本の博物館や資料館では展示が難しかったが、北海道の国立アイヌ民族博物館や沖縄の県立博物館などでは、喪失が危惧される言語の活性化のためにデジタルデータを作成し、情報発信をするケースが増えている。

Abstract : It has been difficult to display folk tales in museums and archives in Japan, but institutions such as the National Ainu Museum in Hokkaido and the Prefectural Museum in Okinawa have created digital data and disseminated information to revitalize languages that are at risk of being lost. The number of cases is increasing.

I. 民話とはなにか、民話の語りの現状

1. フォークロアの原点としてのフォークテイル
 語りのなかに、暮らしの全てがこめられている(民話)
2. 民話の語りと語りの形式
 - ①究極のアナログとしての民話：語り手と聞き手の間に成立する一回限りのパフォーマンス
 - ②語り初めの言葉：とんとむかし、むかしあったとー(とんと昔のさる昔、有ったことえこんだか、ねえこんだか、とんと分かり申さねども、とんと昔あ有ったことえして、聞かぬばなんねえ、え 羽前小国)
 - ③あいづち：おっとお、口にえぼし、さーす
 - ④語り納めの言葉：どんとはれえ、これっきり、えちごさけた(越後さかえた、一期さかえた)
3. 伝統的な民話の消滅
 - ①語りの場の消滅：いろり、ふろば、ねどこ→親子関係の変化・

- 知識の伝達の制度化(学校)
- ②語りの時間の消滅：暗闇(オニの時間)の消滅、藁仕事、祭りの準備、もの作り
 - ③生業の変化：第一次産業(農業)の変化→「昼むかしは語んね」「夏むかし語ると鼠にしょんべんかけられる」
 - ④暮らしの変化：交通インフラの整備・学校・テレビなど→雪に閉じ込められて孤立する(松代町のつつなぎ)、子守と出稼ぎと娘宿の消滅
 - ⑤知識の伝承関係の変化・世界観の変化：年寄りの智慧、信仰と世界観の変化(分かりやすい韓国の場合)

4. 新しい語り手と新しい語りと語りの場の登場・絵本と読み聞かせ
- ①新しい語り手→①昔ながらの語り手が道の駅などで語る②民話が好きで本などで覚えた話を学校・図書館・公民館などで語る(出雲かんべの里、日本民家園)
 - ②昔ながらの語りと新しい語りの違い：昔の語りは身内や近所の子どもに「みんなが知っている話」を語る(聞き手は相槌をうつ)。新しい語りは初めて会う聞き手に語る(聞き手を話しの世界に引き込む技術や小道具が必要)。語りの形式も言葉も違う。
 - ③読み聞かせは、語りではないが、同じような問題をはらんでいる(絵本を作るときにも同じ問題がある)

II. 民話の記録とデジタル化、データベース化

1. 民話を記録する
 - ①文字による記録(日本の場合)：古事記・日本書紀・風土記→竹取物語・お伽草紙などなどの伝統
 - ②民俗学の誕生：①デカメロン、ペンタメローネ、ペロー、②グリム
 - ③民話記録を分類整理する：マリアン コックス、アアルネ、柳田國男、関敬吾
 - ④日本民俗学の蓄積、特に1970年代以降の日本民話の音声による記録：①ソニーのウォークマンの登場、②民間の民話研究者の層の厚さ(→韓国・フランスとの対比)、③音声記録は文字記録の補助手段と考えられていた。
2. 民話の音声記録をデジタル化し、データベース化する
 - ①21世紀の民話の語り：①暮らしと世界観の転換②語りの場・語り手・聞き手の消滅③民話調査者の高齢化④個人所有のアナログテープ記録(推定30万件)の消失の危機
 - ②2001年の「日本民話データベース」プロジェクト：各地の研究者からアナログ調査テープを借り、コンピュータでデジタル化し、CD-ROMとハードディスクに記録し、作業後にアナログテープとCD-ROMを返却する①2001-2005まで科研費の助成によって、20000件強のアナログの民話記録をデジタル化し、エクセル

によって話名、話者名、話者出身地、伝承の経路、聞き手、調査地など十数項目を整理、②2004年から音声記録をmp4にダウンサイズし、ファイルメーカーを利用して、音声データを十数項目から検索可能な「民話データベース」の作成する。

③2006年の「沖縄伝承話データベース」プロジェクト：①1972年の沖縄本土復帰を契機として三大学（立命館・大谷女子大・沖縄国際大学）合同（民話）調査が始まり、この調査の中核となった沖縄国際大学の遠藤庄治と学生たちが、その後約30年の間調査を継続し、沖縄全島で記録した約75000件の民話のアナログデータのデータベース化を目指して2006年4月から「沖縄伝承話データベース」プロジェクトがスタートした。②プロジェクトの事務局を宜野湾市の沖縄伝承話資料センターに置き、アナログテープの調査資料をデジタル化しエクセルに整理して、5年間で約28000件をデータベース化した。この間、検索項目は約四十項目に増加した。

④2011年の「東アジア民話データベース」プロジェクト：①日本本土と沖縄民話のデジタル化を継続しながら、韓国・中国の民話をデータベースに組み入れた。②韓国に関しては、並行して翻訳中であった崔仁鶴民話の話型カタログ「韓国昔話集成（悠書館）」の典型話1055話、中国に関してはエーベルハルトの「中国昔話集（平凡社・東洋文庫）」の典型話242話をはじめ日本語に訳された主要資料467話をデータベース化した。③中国・韓国の民話に関しては、残念ながら音声資料はない。

⑤学術振興会による科研費の支給は2013年を最後に打ち切られた：①2013年までにデータベースに組み込まれた話数は、沖縄39520話、沖縄以外の日本各地22243話、韓国1055話、中国467話、合計63285話である。②2013年以降も、沖縄伝承話資料センターはアナログ資料のデジタル化とデータベース化を継続し、名護市をはじめとする行政機関などの支援を受けて、音声資料総計70663件中58725件がデジタル化されている。③ただし残念なことに、データベース化に必要なソフトウェア（ファイルメーカー）を扱う担当者が急逝したために約20000件ほどのデジタルデータがファイルメーカーを利用したコンパクトサイズのデータベースになっていない。④しかし、エクセルを正しく利用すれば、40数項目から58725件の音声資料を検索することは可能である。

⑤このデータベースの目的とその役割は、以下の通りである。
 (1) アナログ音声資料は、①デジタル化によって劣化を免れただけでなく、今後、録音時の雑音を除き、音質をたかめれば、社会言語学研究者にとっては、地域言語研究の貴重な資料となる。
 (2) とくに沖縄（琉球王国）は、北海道とともに、明治初期に「日本」という国民国家の成立によって日本に組み込まれ、その言語と文化は姿を変えた。その後の共通言語・文化政策によって固有

の言語（琉球語）を失いつつある。

(3) データベースは公的なもので研究者にはUSBによって無料配布されているので、たとえば民話研究者は沖縄全域の民話資料を自宅で閲覧可能である。資料はエクセルによって情報整理されているので、自らの関心にしたがって研究を行うことができる。

(4) データベースは、英語・韓国語・中国語をはじめ複数の言語による民話情報を併存させることが可能なので、将来的には「多様(divers)でハイブリッド(hybride)な性格」をもつことができる。

(5) 民話や民俗(folklore)はそもそも多言語・多文化で国境を超える力を有するが、同時に自文化を相対化し世界の中に位置づける「双方向的性格」を有している。このデータベースは異文化・自文化双方の理解を深め、「国境を解体する可能性」がある。

III、博物館・アーカイブにおける民話の語りとデジタル情報の発信

1. モデルとしての国立アイヌ民族博物館

①アイヌ民族博物館の母体である財団法人アイヌ民族文化財団は1997年に活動を開始し、2013年に財団法人アイヌ民族博物館となり、1976年開館のアイヌ民族博物館を2018年7月に閉館して全面的にリニューアルし、2020年に創設された民族共生象徴空間（ウポポイ）の施設の一部として国立アイヌ民族博物館が誕生した。

②「公益財団法人アイヌ民族文化財団」のホームページからは、「今を生きるアイヌの人たち」「アイヌ語を学ぶ」に始まって「キッズメニュー」に至るまで6つのタグが用意され、たとえば「アイヌ語を学ぶ」のタグをクリックすると初級講座、アイヌ語発信講座、ラジオ講座など12のメニューが用意されている。



③民話の語りに関わる「口承文芸視聴覚資料」はこのグループに登場する。そこには、民話のアニメが22話用意されているが、驚くのはその音声と字幕の種類の多さで、日本語のほかにも英語、韓国語、中国語、のほかにアイヌ語の仮名表記、ローマ字表記などざんぶで12のバージョンがある。驚くのはそれだけではなく、同じグループの「アイヌ語アーカイブ」には、語り手はどうやら4名にすぎないのだが、沙流方言と静内方言の民話と民俗伝承の語りが287件収録され、音声に併せて一行ごとにアイヌ語（ローマ字表記）と日本語訳が付されている。



④アイヌ民族博物館展示のデジタル化

①「国立アイヌ民族博物館」はそのホームページの「バーチャル国立アイヌ民族博物館」のタグをクリックして「バーチャル博物館」の「展示室を見よう」のタグをクリックすると、館内を自由に見て回ることができる。



②博物館のフロアは 2 層で、二階が展示室になっている。

③展示は、おどろくほど簡素で、いわば「アイヌ民族文化入門」の目次のような役割を果たしているにすぎないが、それもそのはずで「国立アイヌ民族博物館」は、広大な敷地をもつ「ウポポイ(民族共生空間)」の一部にすぎず、ウポポイの敷地内には「体験学習館」「工房」「伝統的コタン」などこれまで博物館の限られた空間の中に押し込められていた展示が湖のほとりに展開する形式になっている。



④デジタル情報発信と YouTube の利用

アイヌ民族博物館は、こうしてデジタルによる疑似体験とアナログによる実体験を併設したアイヌ文化の教育・学習センターとなっているが、デジタルによる情報発信の装置として忘れられないのが YouTube の果たす役割である。アイヌ民族博物館のアーカイブに蓄積されたデジタル情報の多くは YouTube によって発信されている。

2. 沖縄各地の民俗・民話アーカイブのデジタル化

北海道にかぎらず日本各地の博物館や資料館が、展示や資料のデジタル化と情報発信を企画していることは明らかである。たとえば国立歴史民俗博物館も「どこでもれきはく」のコーナーを設け、スマートフォンやコンピュータを利用して館内マップを開けば点数はまだ十分とは言えないが、展示の説明などを英語、中国語、韓国語などで受けることができる。しかし、ここでは焦点を民話の語りのデジタル化にかぎって、北海道のアイヌと似た状況にある沖縄の三つのデジタル・アーカイブを紹介する

①沖縄県立博物館・美術館のウチナー民話の部屋

「ウチナー民話の部屋」は、2016 年度から民話・民俗と言語学の研究者が 47000 話あまりの記録のなかから、地域と方言をしぼって 80 話を選定し、推進した 5 ヶ年計画の事業である。公開されているのは 80 話だが、たいへん完成度の高いサイトになっている。

トップページからたとえば「蠅と雀」という話を選ぶ

と、文字情報として話の梗概と、当該の語りの地域と語り手名が提示される。さらに図像の中心をクリックすると紙芝居のように物語の場面が一つずつ展開し、その下に語り手の言葉(方言)がカタカナ、その共通語訳が平仮名で示され、語りの展開にしたがって活字が太字に変化して、方言の音声に随時共通語訳を補う。



これは国頭郡宇奥間で 1908 年に生まれた金城カメさんが、幼い時におばあさんから聞き 1978 年に沖縄国際大学の口承研の学生に語った話である。沖縄方言(しまくとぅば・うちなーぐち)は、アイヌ語のように日本語と別系統ではないが、沖縄出身の学生たちにも理解が難しい。沖縄伝承話データベースでは、カメさんは、同じ話をこの後すぐに共通語で語っている。



②栗国アーカイブス

つぎに、沖縄本島の北西約 60 キロの栗国島の「栗国アーカイブス」を紹介する。これは、二〇一三年から一五年までの一括交付金を利用



して栗国村が立ち上げたサイトで、上の図に示されたように①遺跡、②歴史・民話、③民俗・文化、④年中行事、⑤自然、⑥生物、⑦産業、⑧しまくとぅば、⑨新聞(掲載ニュース)、⑩その他という十種類のアイコンから、栗国島(栗国村)の文化情報にアクセスすることができる。



特に「歴史・民話」のアイコンをクリックすると、「歴史・民話」七二五件の情報のうち五六二話の民話が検索できる。さらに検索のタグから「与那全福さん」の「栗国兼浜」を選べば、与那さんの語りを聞くことができる。音声記録の数は限られているが、音声のない場合は梗概が記されているので、話の概要を知ることができる。



さらにトップページ下部の「民話を読む」「動画を見る」という二つのアイコンから、栗国村が刊行した『栗国島の民話(1992)』と『栗国村史(1984)』の電

子書籍をダウンロードできるし、しまくとぅばと共通語の語りのアニメの動画を見ることもできる。

沖縄本島からフェリーで2時間の人口650人ほどの離島の村が、一括交付金という限られた財源を用いて、民話・民俗という無形の文化遺産を目に見えるかたちで発信したことは快挙であり、一九七〇年代に始められた民話調査研究の成果を目に見えるかたちで示している。

③読谷村史編集室の民話デジタル情報発信

①読谷村史編集室のホームページの民話関連資料は、一九七六年九月の遠藤庄治による講演をきっかけに村民たちが立ち上げた「読谷ゆうがおの会」と国際大学口承研の共同調査の成果である。特にゆうがおの会の会員は村内の全地域（二十二字）の語り手の自宅を巡って聞き取り調査を行い、調査と並行して文字おこし（翻字）を行い、一九八四年から二〇〇三年までに全字十五巻の資料集が刊行した。



②「読谷村史編集室ホームページ」は、戦時記録、戦跡マップ、発行物の紹介と購入などのサイトがリンクされているが、「むんがたい（物語り）」>「くわらべうた」>「しまくとぅば単語帳・マップ」>「いろいろ資料館」などの地域の言葉と口頭伝承に関する情報発信が中心で、栗国村の「栗国アーカイブス」に見られるような地域の暮らし（民俗）を発信して地域を訪れる人々（観光者）に情報を提供し来訪を促す「観光民俗学」的な志向は希薄である。



しかし、村の口頭伝承に的が絞られているために、サイトを訪れた人は、「地域から探す」のページで村の二十二字の語りにたやすくアクセスすることができる。

例えば「伊良皆」のタグをクリックすると伊波蒲戸さん（1894年生）の「勝連バーマー」を聞くことができる。

上の図の下部のブルーの4つのアイコンのうち一番左をクリックすると音声と翻字された方言の文字情報が流れ、二番目のアイコンをクリックすると、語り

をアニメ化した映像が音声とともに共通語のテロップが流れる。

こうした各字の民話に関する行き届いたサービスは、現在のところ六十話に留まっており、なかにはアニメ化のまにあわない音声のみの話もあるが、録音状態は優れていて、見事なしまくとぅば（地域の言葉）で語られた語りの資料の公開としては、これもおそらく前例がないのではないだろうか。



IV まとめ

①本稿は、民話研究というアナログな研究領域が、ミレニアムを画期としてデジタル化された経緯を述べたもので、AI技術の登場とともに急展開しつつある人文学の現状からみれば、すべてが旧技術の領域に属するものである。

②民話の語りに関するデジタル情報発信に関しては、私の知る限り韓国学中央研究院のプロジェクトがもっとも充実している。2015年10月に中国社会科学院で開催されたシンポジウム (Digitizing Oral Tradition: Strategy, Practice, and Collaboration) には、主催国の中国のほか、アメリカ、ドイツ、日本の研究者が参加したが、それぞれの国の現状を披露しただけで、国際的な連携 (Collaboration) についての成果はなかった。口承文芸 (Oral Tradition) 研究の特色の一つは、言語や国境を超えることであるのに、デジタル化の現状は、まだそのレベルにまで達していない。

③今回の報告では、意図せず北海道のアイヌ民族博物館と沖縄の県立博物館、栗国島の栗国アーカイブス、読谷村の村史の編集室のデジタル化の現状を報告したが、北海道（蝦夷）と沖縄（琉球）は明治維新とともに新しく日本に組み込まれた地域で、編入によって言語と文化に大きな変化をきたした地域である。今回の報告ではその文化変容について詳しく述べることはできないが、双方の地域において民話（口承文芸）が地域の言語を守る役割を期待されていることは興味深い。